



▶露山は、大型の農耕馬を専門に描いた。とりわけ苜毛（馬の毛色。白色に黒や灰の差し毛の入ったもの）が好みだったという。馬の体に見える紋様は、「銭型」などと呼ばれる体調の良い馬に出る特殊な紋様。露山の馬に関する知識の豊富さがうかがえる。岩瀬功さん所蔵。（白石区）



▶露山が墨で一筆画を描くのは、大抵酒を飲んで上機嫌の時で、瞬く間に描いたといわれる。もともと馬追いをしている馬の骨格を良く知り、また観察眼の鋭い露山にはお手の物だったに違いない。三田正真さん所蔵。（音更町）

十勝平野に残る足跡

その日帯広は快晴だった。これを「十勝晴れ」というのだろうかと窓から見える景色を眺めながら考えていた。音更町在住の三田正真さん（五十四）を訪ねようと、帯広行ききの汽車に乗っていた。三田さんは、会社経営の傍ら、数年前から露山の絵や足跡について調べているという指折りの露山研究会家である。改札を出ると、三田さんが車で迎えに来てく

れていた。帯広名物の豚丼をほお張りながら話を聞いた。三田さんによれば、露山は道東や道北を中心に各地の農家を渡り歩き、その家の持ち馬を描いて放浪していたという。道東の馬産農家には相当名の知れた画家だったようだ。露山の馬絵の大きな特徴は「八方にらみ」。描かれた馬の目が、どこから見ても見えている者の方を向いていることからそう呼ばれた。「自分の描く絵は、馬一頭分の価値がある」というのが口癖で、気が



▲酒井敏男さん所蔵。縦1 m75cm、横95cmの大きな墨絵だ。恐らくふすま絵なのだろう。露山には珍しい書の入った作品で、書家との合作と思われる。書に「紀元二千六百年」の表記があることから、昭和15年の作と思われる。（八雲町）

向かないと頼まれても描かなかったという。次々と語られる露山の知られざる素顔に、おいしいはずの豚丼の味さえよく分らない。「露山はこの辺りの生まれですか」と尋ねた。すると三田さんはその質問を制し、ある人に会わせてくれると言う。その意味を測りかねていると三田さんは言った。「露山の親戚に当たる人が帯広にいる。直接聞いてみるといい」。

蘇る俊才露山の素顔

露山の本名は、畠中清喜。明治二十年、愛媛県越智郡関前村で生まれたという。関前村は、瀬戸内海の芸予諸島にある。実家はたばこの栽培をしていた。大正の初めころ、先に北海道に入植していた兄甚右エ門を頼って来道、現在の陸別町に入った。陸別では山本商店という材木商で馬追いをし、切り出した木を運んでいたという。絵を学んだのもこのころで、すべて独学であったという。馬追いをしながら、炭で馬の絵を何時間も描き続けたそうだ。ある時、店主から「一時